俳句はかく解しかく味う

高浜虚子著

芭蕉・蕪村・一茶・子規など元禄から明治まで29人の俳人の句およそ200句をとりあげ，俳句とはどういうものか，どう味わったらよいかを説く。ずばりと句の核心を言いあてる評解，自在な語り口は見事という他はないが，その背後には「俳句は即ち芭蕉の文学」だとする虚子(1874-1959)の確信があった。(解説＝大岡 信)

緑 28-2
岩波文庫

俳句(はいく)はかく解(かい)しかく味(あじわ)う

1989年10月16日　第1刷発行©

定価 360円
(本体350円)

著　者　高浜虚子(たかはまきょし)

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ッ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・三秀舎　製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN4-00-310282-7

岩 波 文 庫

31-028-2

俳句はかく解しかく味う

高 浜 虚 子 著

岩 波 書 店

目　次

俳句はかく解しかく味う……五
解　説……大岡　信……一八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俳句はかく解しかく味う

俳諧の歴史というものは厳密にいえば殆んどまだ調べがついていないというてよい。芭蕉とか蕪村とかいう重(おも)な二、三の俳人については相当の研究をした人もあるけれども、俳句全体の歴史を文学史的に研究した人はまだ一人もないといって差支ないのである。しかして世間で普通に説いている俳諧史は極めて簡略な極(き)まりきった説話に過ぎん。今一層大胆に引っくるめて言えば、徳川初期から明治大正の今日に至るまで、多少の盛衰もあり多少の変化もあるにしたところで、要するに俳句は即ち芭蕉の文学であるといって差支ない事と考える。即ち松尾芭蕉なる者が出て、従来の俳句に一革命を企てた以来二百余年に渉(わた)る今日まで、数限りなく輩出するところの多くの俳人は、大概芭蕉のやった仕事を祖述しているに過ぎん。そこで今俳句を解釈するに当っても、元禄の俳句はこういう風に解釈せねばならぬが、天明の俳句はそれと全く違うてこういう風に解釈しな

ければならぬとか、明治大正の俳句はこういう風に解釈しなければならぬというような、そんな複雑した変化のあるものではなくって、或る俳句を抜き出して来て、一応それを解釈する事が出来るようになった以上は、大概の俳句はそれに準じてさほど困難を感ぜずに解釈の出来るものである。唯その中に読み込まれている材料の解釈がむつかしいがために、解釈が出来ぬというような場合は論外であるが、俳句なる或る特別の一つの詩形を解釈するだけの事は、若干句の解釈によって容易(たやす)く領得せらるる事と考える。そこで私は殆んど時代なんかに頓著(とんじゃく)なしに数十句の解釈を試みて、諸君の俳句に対する解釈力というようなものを養うという事にしようと思う。

な折りそと折りてくれけり園の梅　　太祇(たいぎ)

春先きになって、或る人の庭に梅の花の咲いているのを見て、彼処(あすこ)にいい梅の花が咲いている、あの枝が一本欲しいものだと思うて、それをその家の人に断(ことわ)りもしないで折ろうとしていると、意外にもそこにその家の主人がいて、その梅を折ってはいけない、

と叱りながらも、そんなに欲しいのならば上げようといって、かえってその主人が手ずから梅の枝を折ってその人に呉れたというのである。同じ物を盗むのでありながらも、いわゆる風流泥坊で、その盗む者が花卉の中でも殊に清高な姿をして芳香を持った梅の花である事が、一種の面白味を持っている。またその梅を折る人も物を盗むは悪い事と知りながらそれを金に代えようというわけでもなく、多寡が梅の花の一枝位だから折ってやれと、窃かに折り取ろうとしていると、思い懸けなくも其処に主人の声がして梅の花を折ってはいかんと尤められたので、吃驚して手を止めたのであるが、其処の主人もまた、それを尤めたばかりで無下に追い払うのも、それを折る人の心持を十分に解釈することの出来ぬものとして、何処かに自分自身不満足を感ずるので、そんなに黙って折るのはいけないが、欲しいのなら上げようといって、かえって手ずからその枝を無造作に折ってその男にやったのである。かくしてその盗もうとした人も、それを尤めた人も、梅花そのものを通じて互にその心持を領解し合うところに、この小葛藤の大団円はあるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

親鶏のひよこ遊ばす葵かな

成美

庭先きに葵がついついと立っていて、その青い葉の頂きの方に赤い花が咲いている。夏といってもまだそうむやみに暑くならない頃で、むしろすがすがしい心よさを感ずる位の時候であって、その葵の近所には赤い鶏冠を持っている親鶏が、黄を帯びた小さなひよこを連れて餌を探しながら歩いている。葵の幹の曲りくねったところもなしについつい立っている形や、強味のある葉や、堅いような花やが初夏の心持にふさわしいと同じように、雛を孵して間もない親鶏が満足気にその雛を引き連れて歩いている様子からその親鶏の大きく丸い形や雛どもの小さく丸い形やまでが、やはり初夏らしい心持を持っている。その上色の配合の点からも葵の葉の青いのに、花は赤く、親鶏の鶏冠は一層赤く、雛は黄いというところに余り色の混雑がなくなってしかも色彩の配合の面白味がある。それがまた初夏の心持を十分に好く現わしている。今一層はっきりした印象を描き出して見るならば、その葵も親鶏も雛もそれぞれくっきりとした影を地上に落してい

るような心持もする。この種類の句は絵画と同じような力をもって人に迫るのである。

新蕎麦や長田が宵の馳走ぶり　　合瓜

この長田は長田の荘司の事で、例の源の義朝を泊めて置きながらこれを暗殺して平家の方に党した等の事蹟に基いて作ったもので、長田が義朝を家に泊めて置いたのは節季から正月にかけての事であったのだから、それにすると新蕎麦というのは事実に合わぬけれども、俳句には往々にして事実には頓着なしに趣きの方から趣向を立てる事が多いからこの句もやはりその一例と見るべきものである。いよいよ今夜か明日は義朝をたばかって弑してやろうという前の晩に、折節出来た新しい蕎麦粉を打って、新蕎麦が出来たから一つ召上らぬかと他意もなげにそれを勧めて、心から義朝を款待するように見せかけたというのである。なまじい際立った御馳走などをしては、どうもいつもと違うた御馳走を今夜に限ってするのは、少し変だなと万事に警戒している落武者の事であるから、忽ち気取られることもないとはいえんのであるが、同じ馳走をするのにも、新蕎麦

を打ったからというて蕎麦を勧めるという事は無造作であって、しかも親しみのある馳走ぶりであって、それで酒でも勧めて義朝に油断をさすとしては、いかにも事実ありそうに思われる事柄である。季節に頓着なしに感じの上から、新蕎麦を持って来たところが詠史の句としては取柄(とりえ)である。俳句の詠史は漢詩や和歌などと違うてその事柄を優美にしたり、荘重にしたりすることはしないで、むしろその事柄と反対に卑近な物を持って来たり、滑稽な物を持って来たりして頓挫(とんざ)を与えるものが多い。この句などもその一例で、長田忠致(おさだただむね)が源の義朝を弑したというような事柄は歴史の中でも悲壮な事柄であって、もしこれを漢詩にでもすれば堂々たる文字で、英雄の末路を弔(ちょう)するのであるが、それが俳句になると極めて卑近な新蕎麦というようなものを持って来て、長田が義朝を弑す前の晩には新蕎麦を御馳走して一杯飲ましたのだそうだ、はあはあ、なるほど新蕎麦で一杯やったのか、などと話すとすると、その悲壮な事実に頓挫を与えて其処(そこ)に一種の軽味(かるみ)が生ずるようになって来る。これが即ち俳諧趣味ともいうべきものであって、俳句の詠史は多くそういう風になるのである。

易水にねぶか流るゝ寒さかな　　蕪村

詠史の句の話をしたついでに、今一句この句の解釈を試みて見よう。『唐詩選』五言絶句の第三句目に「易水送別」という題で、駱賓王の、「此地別レシトキ燕丹一。壮士髪衝レ冠ケリヲ。昔時人已没シ。今日水猶ホシ寒。」とあるのは人口に膾炙した詩句で、秦始皇を弑そうとして壮士荊軻が燕の太子の燕丹に易水のほとりで分れた事蹟を咏じたのである。この事蹟を簡単に説明すると、戦国時代に燕の太子の燕丹というのが、秦の国に人質として行っていたのを始皇帝が虐待した、それを憤って燕丹は燕の国へ逃げ帰り、何とかしてその恨を報じようと思っていた矢先、秦の将軍の樊於期というのが罪があったのを逃れて燕の国へ来た。そこでその樊於期の首を討って、その首と燕の国の地図とを持って、それを始皇帝に献上すると見せかけて、暗殺しようとしたのが燕の国の壮士の荊軻であった。これは燕丹の依嘱を重しとして荊軻はもとより一命を棄てるつもりで出掛けたのであったが、不幸にして見現わされて殺されてしまった。そのいよいよ秦の国へ入り込もうと

する時易水という川で燕丹と別れた。その遺跡として易水を唐の駱賓王が弔うた時に、この詩は出来たのである。蕪村はよく唐詩を換骨奪胎して句を作っておる。この句も恐らくこの詩から思いついたものであろう。蕪村は実際支那へ旅行したことはないので、易水の景色を知っておるわけはないが、日本内地などで見る景色から想像すると、恐らくその易水という川もただの川で根深などが流れているであろう。「風蕭々兮易水寒」とか、「今日水尚寒」とかいうと格別な景色かとも思われるが、恐らくそうではなかろう。川上には根深を洗う百姓などが沢山いて、その洗った根深の葉片が薄濁りのした水の中に青い色を見せて流れているのであろうというのである。蕪村の想像からいえば「あろう」であるのだが、それを実際その景色を見たように「ある」としておるところがこの句に力を与えておるのである。想像も断定もその人の心の内の現象として見れば畢竟同じ事である。蕪村などは好んでこの断定の形式を取っておる。即ちこの句の如きも前の長田の新蕎麦と同じ事で、漢詩などでは「風蕭々兮」と言ったり、「壮士髪衝冠」とか言ったりして、ものを仰山に言って易水の寒さを咏じておるところを、俳句で

あっては極めて卑近に「根深の流れる」という事を以て軽くそれを叙しておる。前に漢詩を控えた上でこれを見るとやはり一種の頓挫があって、軽い滑稽味を覚える。そこが即ち俳諧趣味である。

同じく滑稽味と言ったところで、これらはげたげた笑うような滑稽ではなくて底には淋し味も含んだ品のいい滑稽である。ユーモアというような部類に属するものである。ところが俳句の滑稽もずっと以前になると、大分趣を異にした駄洒落に類するものがある。ついでにその一句を挙げて見ようならば、

かぜ寒し破れ障子の神無月　　宗鑑

この頃は大分風が寒くなって来た。その寒い風が吹くにつけ自分の住居の破れ障子が今更のように目について侘びしく、それから吹込む風も寒い、のみならず世上は八百万の神々が出雲の大社へ旅立をせられて、いずれの社もその御留守の即ち神無月であると思うと一層の寂しさを覚える、というこれだけのものとすれば、「神無月の破れ障子に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com